

美術教育の方針(七)

黒田清輝

▲繪畫當初の目的は寫實にあり

繪畫の技術は天然の眞を寫すを當初の目的とするは、何れの國何れの時代と雖も異ることなし、而して繪畫を作り、趣味を與へ思想を發揮するは技藝の能力にして箇人の資性に待つ所大なりと雖、抑之を發揮するの手段に熟せずしては如何なる思想の美ありとも、之を用ゆるの法なからん、寫生は實に繪畫の根本的要件なり

▲姑息の改良法

從來繪畫の革新を論ずる者は、歐洲藝術の長處を取りて我短處を補ふべしとせり、是れ甚だ良し、今の時勢は實に斯くあるべきを命示したり、然れども世の改革者の多數は徒らに技功の外面にのみ眩惑して姑息の手段を試むるものなり、渠等の洋畫を見るや、陰陽濃淡の變化に富み、光線遠近の差別を現したるが如き皮相の結果を以て彼の特長なりとし、直に之を取りて繪畫の外見を新にせんとす、此の如き主義を以て、所謂和洋の折衷畫なるもの續々として作り出されつ、あるなり、是最も厭ふべき改良法にして彼の長を取るを知らずして、彼の技功を模倣するものなり、何をか模倣と名くるやといふに既に發達したる技法を踏襲するを模倣なりといはん、模倣は新たなる發達を杜絶するものにして其弊害は我の美質を犠牲にして却て彼の短處を得るの結果を生ずべし、畢竟歐洲藝術の今日ある所以の理を究めず、又我短處の何の邊にあるやを察せずして姑息の改良を企るものにして決して

新たなる藝術を興すの道にあらず、

▲歐洲藝術の長處

思ふに歐洲藝術の美質は根本の修養にあり希臘術の開けたる以來彼は間斷なく天然に就きて技法の開発を求めたり、彼の長處は既に發達したる技法よりは之を發達せしめたる手段にあり、故に其藝術は思想の變遷に應じ又學理の應用に依り常に改良し得べき路の開けて今や完全なる學理的の修養法を以て藝術の本源を養ひつゝあり

▲我之短處

技藝にありても亦他の學術にありても我邦人の短處は眞摯なる研究を忽にして速成の結果を需るにあり、確實なる研究を経ざれば完備せる知識は得られず、知識完からずしては大成を望む可らず、近時泰西の事物に觸接して以來何事も外形の模倣をのみ勉めたるも眞の發達を見ざるは研究の熱誠に乏しきが爲めにして、此病弊は總ての學藝をして、遠大の成功なからしむるものなり誠心なる革新者は須く之に着目し、本源の改良を加へざる可らず、

『二六新報』明治三十三年三月三日